

## 2022年度「神戸女学院の100冊」書評コンテスト 講評

「神戸女学院の100冊」は、神戸女学院大学の全教員が専門分野の学びの基礎となる書籍を選び、編み上げたものです。3学部5学科の、人文科学、社会科学、自然科学から芸術にわたる19分野の95冊、そして、院長推薦の5冊の計100冊は、本学でリベラルアーツを学ぶ大学生の道標となり、新たな世界への扉を開いてくれる珠玉の書ばかりです。

今年度、2022年度は、全学より3名の応募がありました。皆さん大変熱のこもった書評を書いていただきましたが、各分野の先生方に慎重にご審査いただき、結果、1名の学生さんが優秀賞、1名の学生さんが佳作に選出されました。

優秀賞の総合文化学科4年 中西 杏奈さんは、ロシア・東欧文学者である沼野充義氏の編著『世界は文学でできている』をとりあげておられます。英文学、日本文学、ロシア文学といった垣根を超えた「世界文学」を嗜む、楽しむための道標、文学のすすめとして位置づけられているこの本は、主として五名の異なった文学観を持つ識者との対談集として編纂されています。対談を書評するというのは非常に困難な作業であります。中西さんは個々の対談の概要をとりまとめ、個別のテーマについて深掘りをして論ずるという非常に難しい作業を、手際よくされておられました。単に話を後追いするのではなく、自らの大学での学びを承けての独自の視点を提供するなど、意欲的に評しておられます。後半にあります、「世界文学」「文学」に関する視点の提供が、より具体的になるともっと面白いだろうなど私個人は思いましたが、非常によく書けた書評でした。

佳作の心理・行動科学科4年 高見 名都さんは、フェリックス・ポール・バイステック著『ケースワークの原則－援助関係を形成する技法 [新訳改訂版]』の書評を書かれました。ご自身もソーシャルワーカーを目指しておられる高見さんからすると、この本を選ばれることはごく自然なことであったのだと思いますが、非常に熱のこもった書評でありました。後半でこの本について感じたわだかまり、腑に落ちた点、疑問について論じておられますが、こちらもご自身の本学での学び、それをうけての将来への希望を含め、よく伝わる文章でした。個々の論点がそれぞれどこへ向かっているのかがより明確化するともっと良くなるのかな、とは思いましたが、この本への興味、それを受けての視点などが良く伝わる良い書評でした。

残念ながら1名の方が今回は選外となりましたが、大変一生懸命努力して書いてくださったと思っています。ご応募いただき、ありがとうございます。

今回受賞された皆さんのみならず、他の学生さんにとりましても、読書体験は文章力、考察力、問題解決能力も向上させてくれる、重要なツールだと考えます。人々の活字離れが言われ出してから相当の年月が過ぎておりますが、本を読むという行為は、私たちに、情報過多のネット時代の中、情報から一步引いて腰を落ち着けて他者の知見を熟考する貴重な機会を与えてくれるものと信じております。学生の皆さんには、今後とも「100冊」のみならず、豊かな読書体験を持っていただけることを期待しています。最後になりましたが、受賞された皆さんに、改めておめでとうの言葉を贈りたいと思います。

副学長 立石 浩一